

12 小国 153  
二葉

# こくごのほん

新教育部検定済教科書  
新教育実践研究所編



T1A7  
1L0  
2

一年下

2

教科  
34  
0130



Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



Kodak Gray Scale

C  
Y  
M

© Kodak, 2007 TM: Kodak

60338  
教科書文庫

6
810
34-1950
01304 49921



教科書文庫  
6  
810  
34-1950  
0130449921

中央図書館

文部省検定済小学校用書

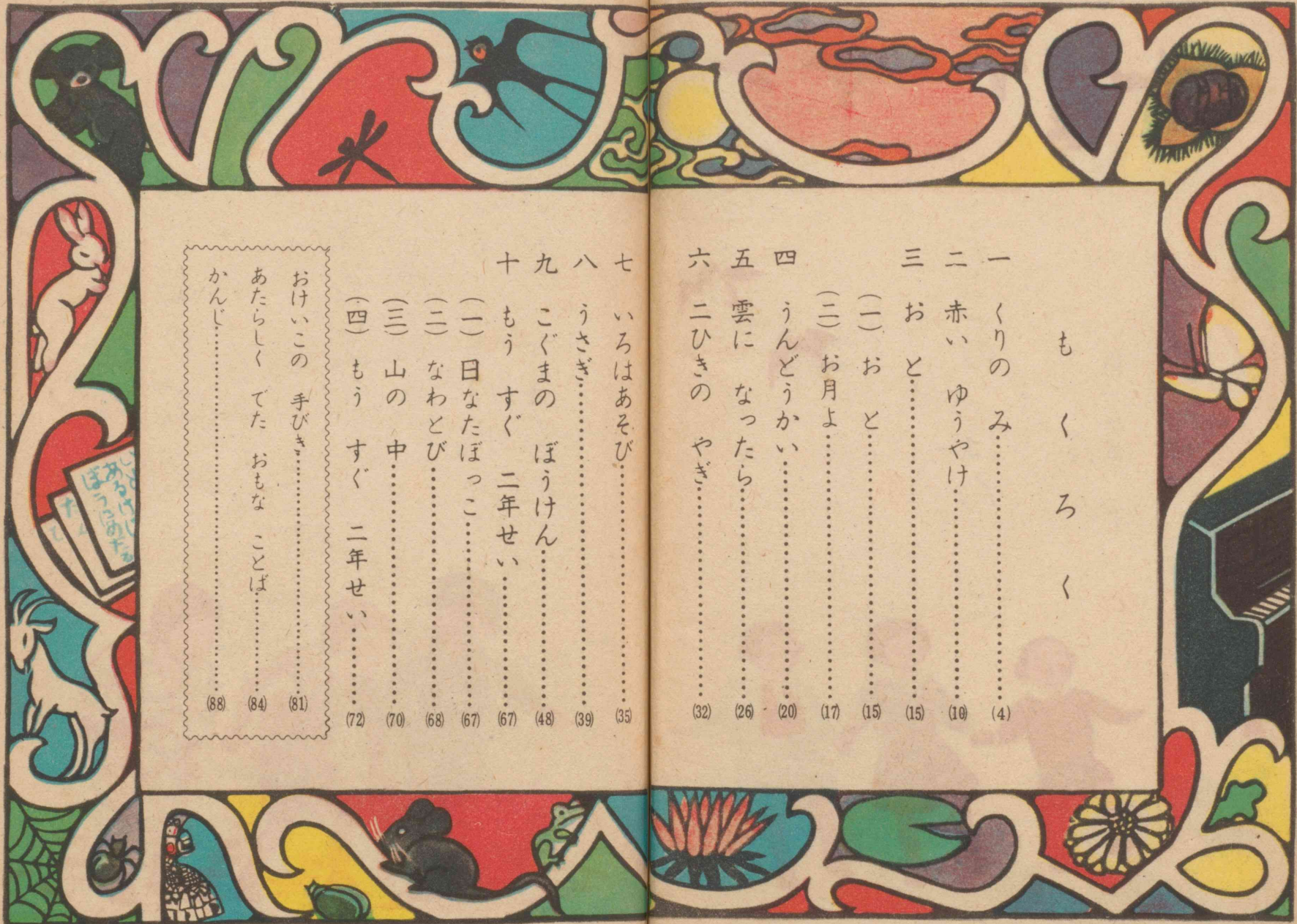


こくごのほん

第一学年 下

広島大学図書  
0130449921

広島大学図書  
0130449921

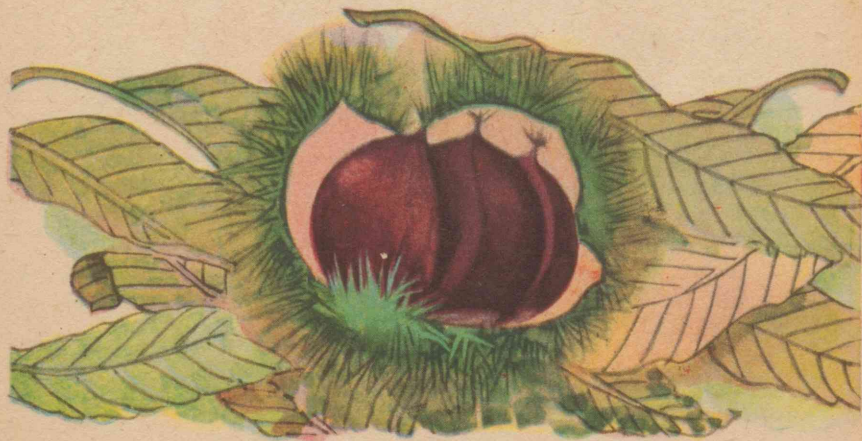


もくろく

- 一 くりのみ……………(4)
- 二 赤い ゆうやけ……………(10)
- 三 おと……………(15)
- (一) おと……………(15)
- (二) お月よ……………(17)
- 四 うんどうかい……………(20)
- 五 雲に なったら……………(26)
- 六 ニひきの やぎ……………(32)

- 七 いろはあそび……………(35)
  - 八 うさぎ……………(39)
  - 九 こぐまの ぼうけん……………(48)
  - 十 もう すぐ 二年せい……………(67)
  - (一) 日なたぼっこ……………(67)
  - (二) なわとび……………(68)
  - (三) 山の 中……………(70)
  - (四) もう すぐ 二年せい……………(72)
- おけいこの 手びき……………(81)
  - あたらしく てた おもな ことば……………(84)
  - かんじ……………(88)

ひろし 「くりの みが。」  
 しみげつお 「のぞいてる。」  
 ひろし 「いがの なかから。」  
 しみげつお 「いがの なかから。」  
 ひろし 「くりの みを。」  
 しみげつお 「かぞえて みよう。」  
 ひろし 「一つ、二つ、三つ。」



ひろし 「くりの みが。」  
 しみげつお 「おちて いる。」  
 ひろし 「いがの ままだ。」  
 しみげつお 「いがの ままだ。」

— くりの み





ひろし 「くりの みが。」  
 しみげつお 「えだから おちる とき。」  
 ひろし 「くりの みは。」  
 しみげつお 「くりの みは。」



しみげつお 「一つ、二つ、三つ。」  
 ひろし 「くりの みは。」  
 ひみつお 「いがの なかだ。」  
 ひろし 「だきあって いる。」  
 ひみつお 「だきあって いる。」

ひろし「いつまでも はなれまいと。」

みつお「かたく。」

しげる「つよく。」

ひろし「やくそく したに ちがいない。」

しげお「そうだ。やくそく し」

たのだ。

ひろし「くりの みが。」

みつお「三つ ならんで。」



しげる「なかよしだ。」

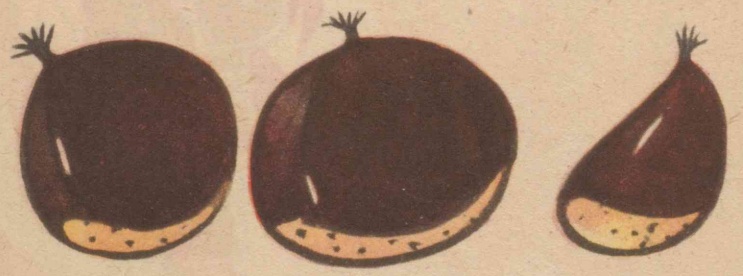
みんな「なかよしだ。」

ひろし「くりの みを。」

みつお「三つ ならべて。」

しげる「秋の 日は あたたかい。」

みんな「秋の 日は あたたかい。」



二 赤い ゆうやけ



はげいどうの 赤い はに、赤い とんぼが 一ぴき  
とまって、やすんで いました。

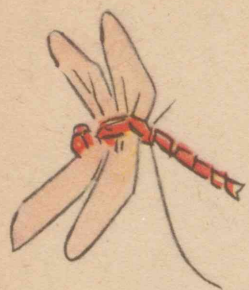
ひとりの 子どもが それを みつけて、こっそりと  
ちかよって きて、とんぼの しっぽを つかまえました。  
た。

ぶうぶうと、とんぼは はねを ならしましたが、も  
う もう まに あいませんでした。子どもは はねに  
手を かけながら、にわから こえを かけました。

「おかあさん、いと ちょうだい。」

おかあさんが えんに でて きて、子どもに いと  
を わたしました。とんぼは いとに つながれました。  
子どもは いとを ゆびに まきつけて、とおりの  
ほうへ でて いきました。子どもたちが、おおせい  
あつまって あそんで いました。

ちょうと まっかな ゆうやけが、あたまの 上まで



とんぼは、どちらへ いったでしょう。空へ にげて  
も、いと は からだに ついて い  
ました。いと の はしが、でんしん  
ばしらの はりがねにでも からま  
りついて いないでしょうか。もし

たり、なかまの 子どもと いっしょに かけたり し  
て いる うちに、子どもは うっかり いとを はな  
して、とんぼを にがして しまいました。  
からだに いとを つけたまま、とんぼは とんで  
いきました。



ひろがって いて、いと の  
とんぼと おなじ とんぼ  
が、なんびきも、あかるい  
空を まって いました。  
どの とんぼも、みな、赤  
い ずぼんを はいて い  
ました。はねを のばして、  
いったり きたり して  
いました。

空の とんぼを ながめ



そう になったら、どうでしょう。それつきり どこへも  
とんでは いかれません。よなかになっても、そこに  
そう して いるより ほかは ありません。雨が ふ  
っても、そこに そう して、ぬれながら いるより  
ほかは ありません。

赤い ゆうやけ。

むらでも まちでも、どこへ いても 赤い ゆう  
やけ。

こんな とんぼが、まだ ニ三びき、どこかに いる  
かも しれません。

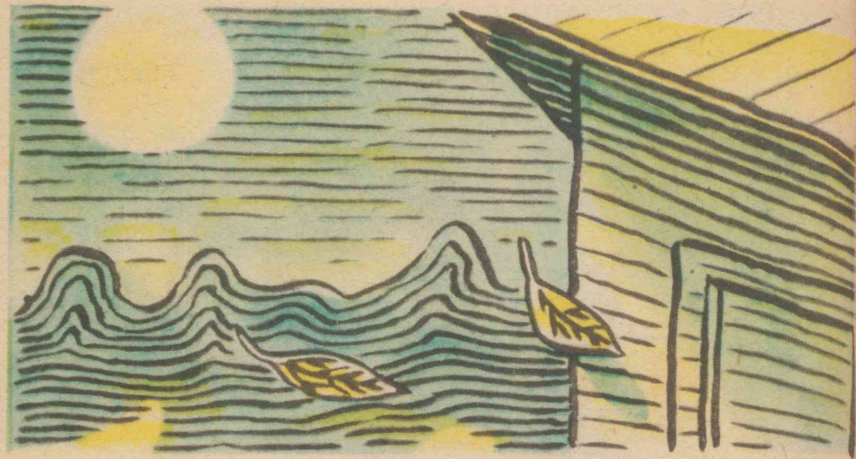
三 おと

(一) おと

ぽろん。

ぴあのって、  
いい おとね。





ぽろん。

ぴあのの おと、  
どこへ いくの。

ぽろん。

あの おと、  
ちようだい。



(二) お月よ

とん、

とん、

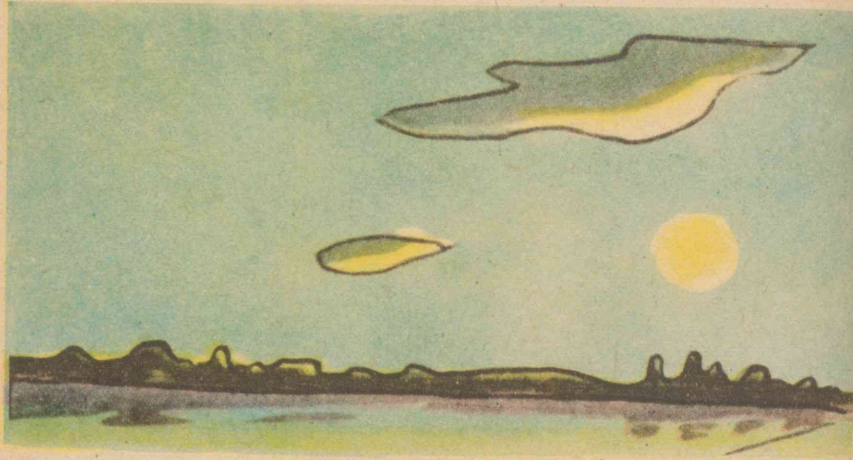
とん、

あけて ください。

どなたです。

わたしや 木の はよ。

とん、 ことり。



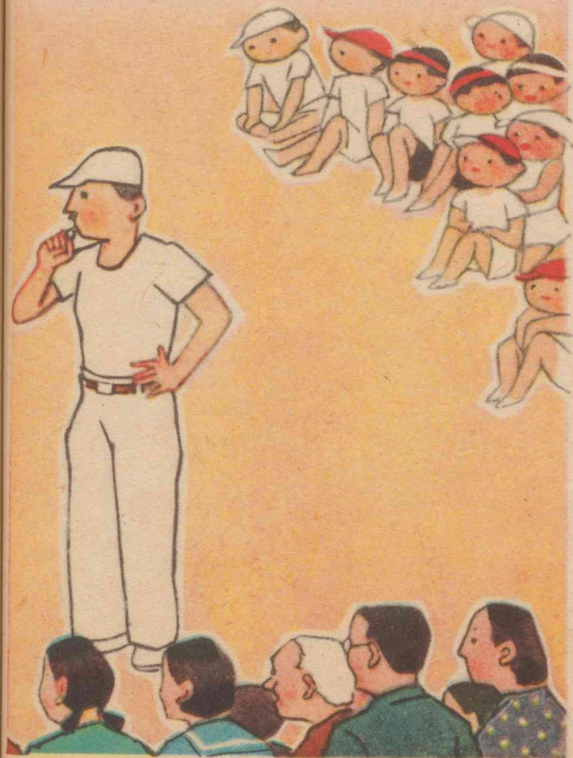
とん、  
とん、  
とん、  
あけて ください。  
どなたです。  
月の かげです。  
とん、 ことり。



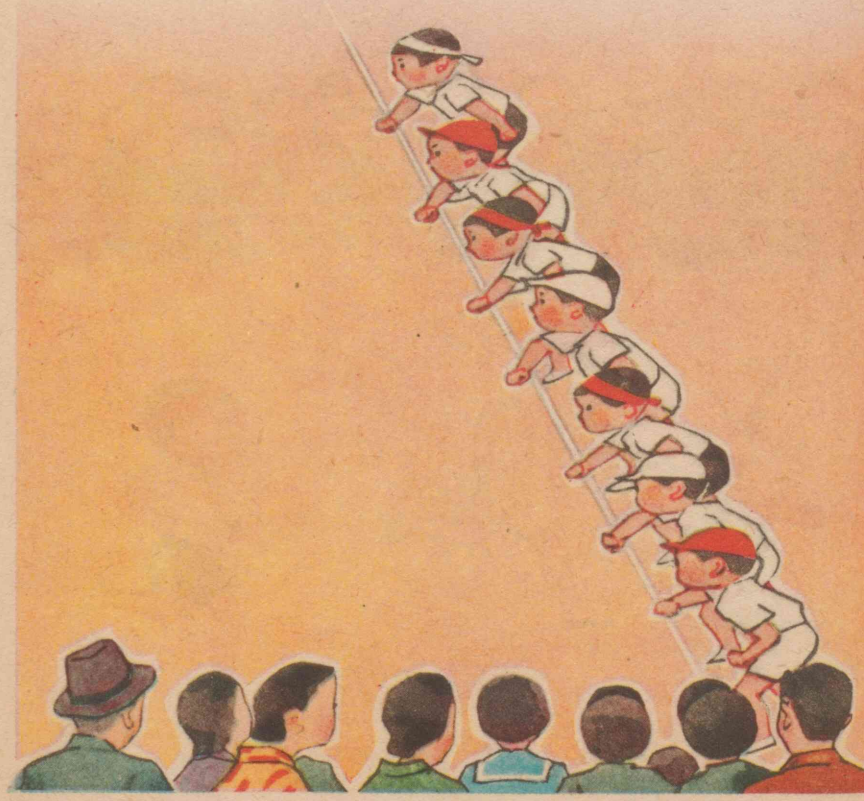
とん、  
とん、  
とん、  
あけて ください。  
どなたです。  
わたしや かげです。  
とん、 ことり。

四 うんどうかい

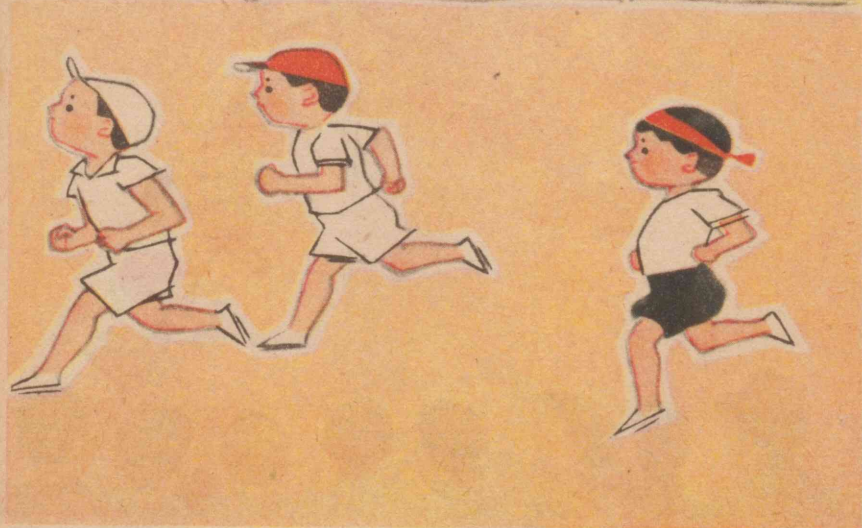
ぴいっ。  
ふえだ、  
よういだ、  
がんばるぞ。  
一れつに  
ならんだ  
ぼくらの



くみだ。  
かけるぞ、  
五十めえとる、  
白い  
てえふだ。  
赤、青、  
白、き、  
目あての  
はただ。



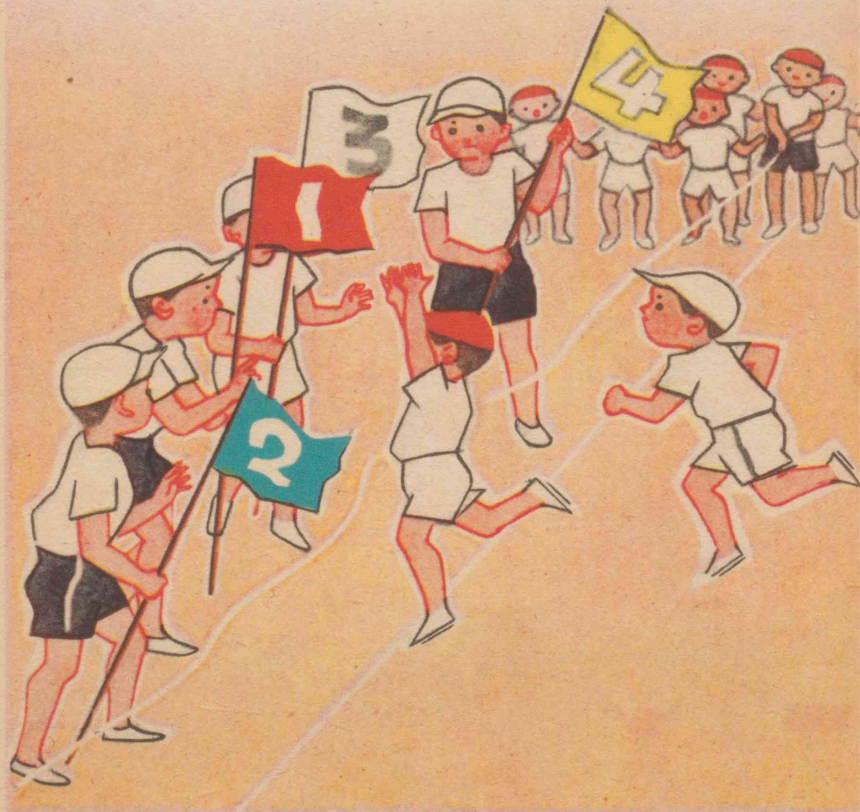
せんせいだ、  
おかあさんだ、  
ねえさんだ、  
おともだちだ。  
みんな、  
こっちを、  
みて  
いるぞ。



ようい、  
どん。  
かける、  
かける。  
みて いる  
人は、  
もようだ、  
なみだ。



一ちやく、  
二ちやく、  
三ちやく、  
四ちやく、  
はた、はた、  
はた、はた、  
うれしい、  
一ちやくだ。



がんばれ  
わあっ。  
がんばれ  
わあっ。  
五十めえとる、  
そら、  
そら、  
そこだ。





て いきます。

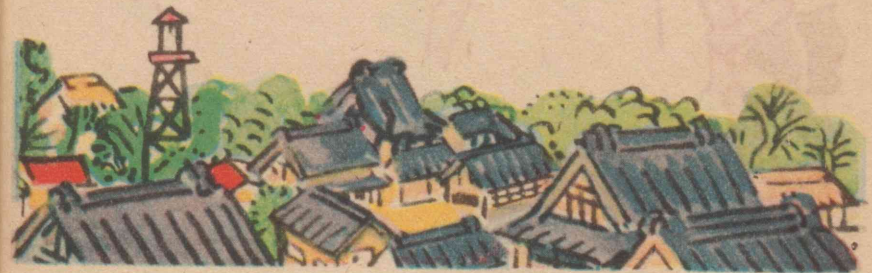
でも、あまり とおい  
ところへは いきません。  
いつも、おかあさんが み  
える ところから、  
「ぼく、ここに いますよ  
う。」

と、おかあさんを よびま  
す。おかあさんは、きつと、



五 雲に なったら

雲に なったら、ぼくは、  
おうちの やねよりも、火  
のみの やぐらよりも、お  
ふるやさんの えんとつよ  
りも、山の てっぺんより  
も ずうっと、ずうっと、  
たかい ところへ、あがつ





す。めずらしい ものを、  
 たくさん みて きて、あ  
 とで、おかあさんに、くわ  
 しく おはなし して あ  
 げます。

花の つぼみが ひらく  
 とき、草や 木や、はたけ  
 につくった ものが の  
 びる とき、

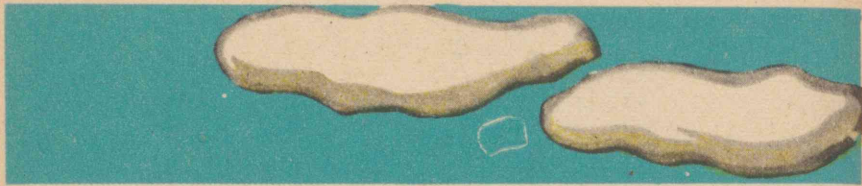


あの やさしい 目で、空  
 の 上の ぼくを、みて  
 くださるでしょう。

おかあさんが、おしごと  
 に むちゆうに なって  
 いらっしやる とき、ぼく  
 は、ふうせんのように、ふ  
 わり ふわりと、とおい  
 ところへ、とんで いきま







「雨ふりの日は、いやだなあ。」  
というときには、すぐやみます。あおむいて、空をみる 目じるしに なるだけの、はねのような、白い、きれいな雲になっ  
ています。



「雨がほしい。雨がほしい。」  
と、なくかえるのこえをきいたら、すぐそこへ、どっさり雨をふらしてあげます。  
でも、たかげたや、じょうぶなくつのない子が、

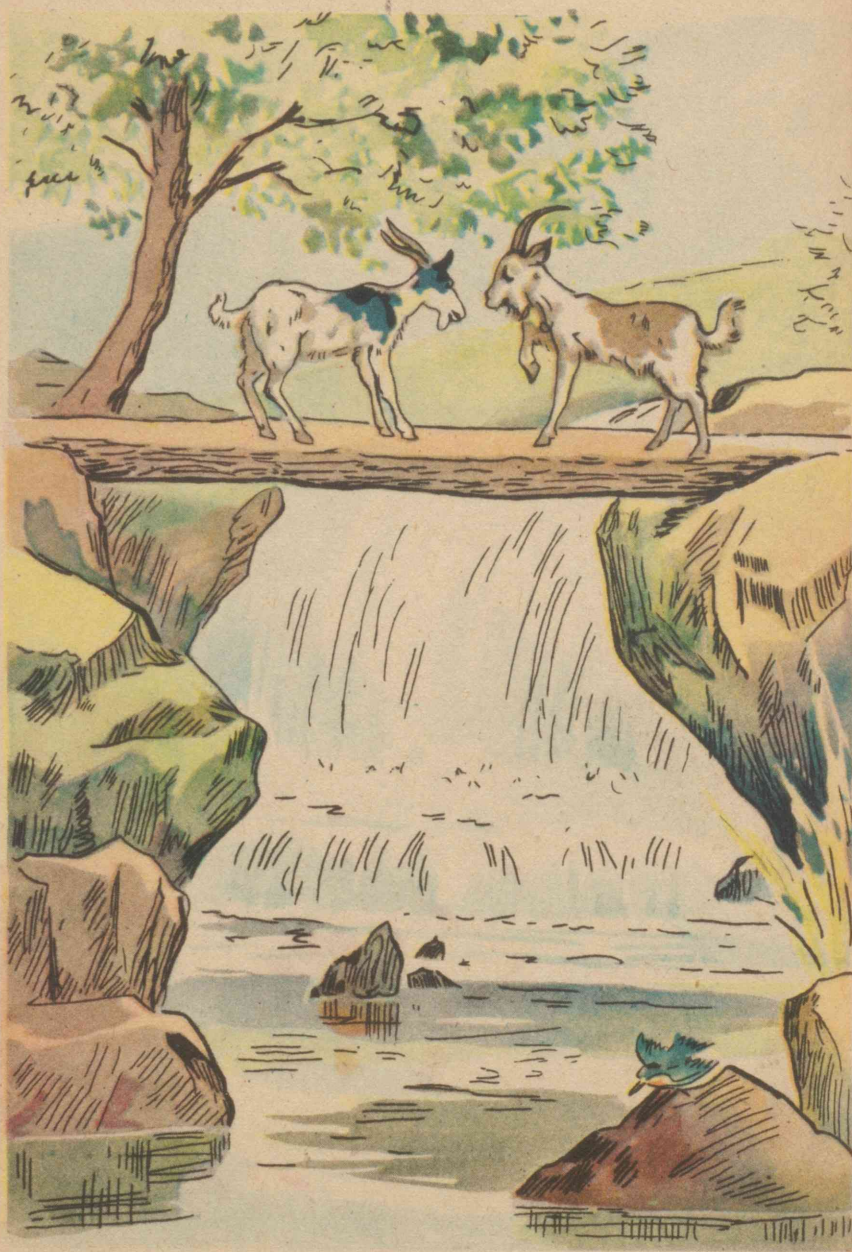


六 二ひきの やぎ

たに川に、まる木ばしが かかって いました。  
二ひきの やぎが やって きて、りようはしから  
わたりはじめました。

二ひきの やぎは、はしの まん中で であいました。  
「ぼくが さきに わたるんだよ。じゃまだから のい  
て くれたまえ。」

「いや、ぼくが さきだよ。きみこそ のいて くれた。」



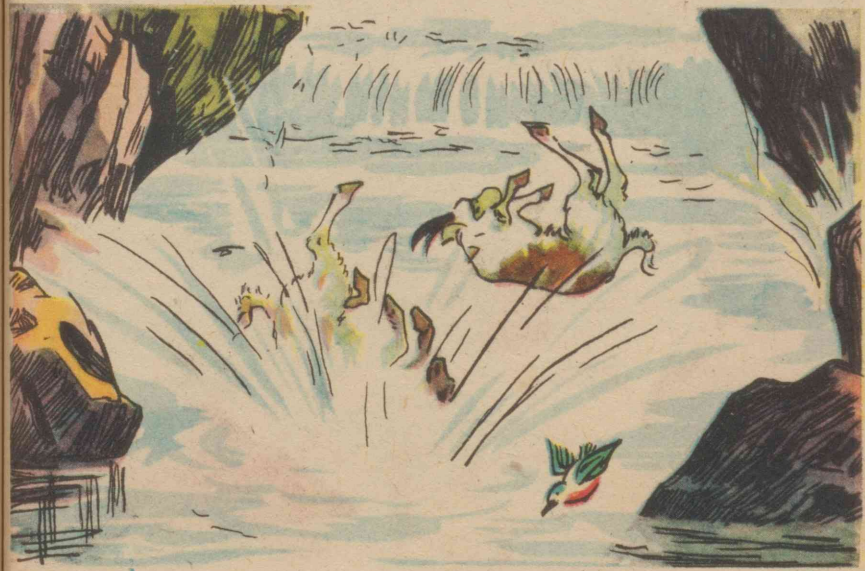


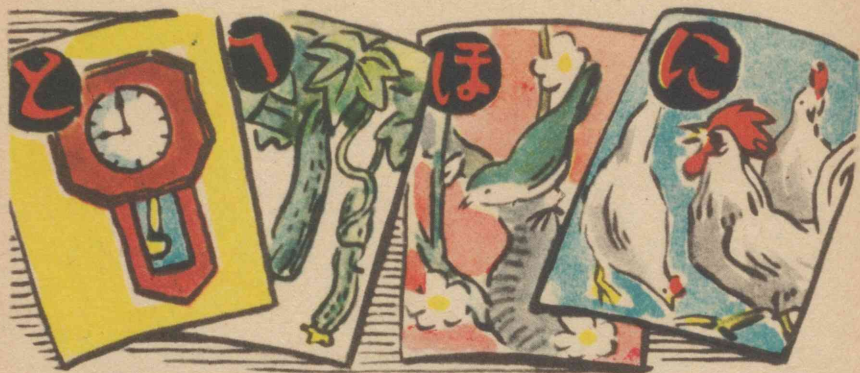
「いのつくものなあに。」  
 「いぬ、いえ、いか、いかけやさん、  
 いけ、いし、いしやさん、いす、  
 いしや……。」  
 「まだまだあるよ。」  
 「いた、いたち、いちば、いちご……。」



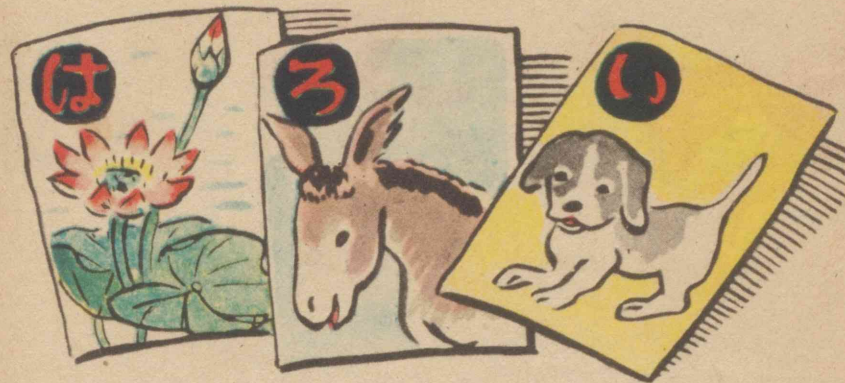
まえ。」  
 あぶない はしの上で、  
 つのつきあいをはじめま  
 した。  
 二ひきとも 足をすべ  
 らして、たに川に、どぶん  
 と おちこんで しまいま  
 した。

七 いろはあそび

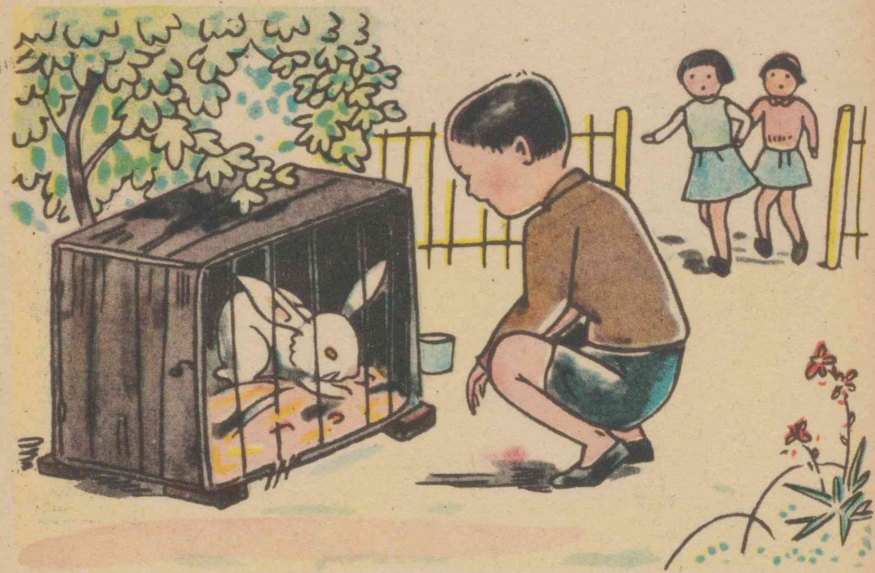




「はい。」  
 えさんは、えを かいてね。  
 あきらさんは、かるたの 大きさに  
 がようしを きりました。それから、  
 その かるたに、ことばを かきはじ  
 めました。  
 いぬは わんわん。——ろばの みみ  
 ながい。——はすの 花が ひらいた。  
 ——にわとり 三ば。——ほうほけきよ  
 は うぐいす。——へちまは ながい。



「たくさん あるよ。いも、いね……。」  
 「ねえさん まって。ぼくが いうか  
 ら……。いと、いりまめ、いろり、  
 いわ、いわし……。」  
 「よく かんがえたね。」  
 「ねえさん、ぼく、とても いい こ  
 とに きがついたよ。」  
 「なあに。」  
 「いろはがるたを つくろうよ。ぼく  
 が ことばを かんがえるから、ね。」



—とけいは 九じだ。

「なんまい あるか、かぞえて ごらんなさい。」

「二、四、六、七、七まい あるよ。」

「いろはにほへとは、いろはうたのはじめですよ。」

「ねえさん、いろはは うたなの。」

「うたですよ。」

「さあ、えを かきますよ。あきらさんも、てつだって  
ちようだい。できたら、みつ子を いれて、かるたと  
りを しましう。」

八 うさぎ

うさぎの はいって い  
る はこの まえで、あ  
きらさんが しゃがんで  
うさぎを みて います。  
ちよ子さんと みつ子さ  
んが あそびに きまし  
た。

ちよ子「あきらさん、なに して いるの。」

あきら「うさぎを みて いるの。とても かわいいよ。  
みて ごらん。」

みつ子「まあ、かわいい こと。この うさぎ、いつ  
きたの。」

あきら「きのう、おじさんの うちから もらって き  
たんだよ。」

ちよ子「まだ、子どもね。」

あきら「うまれて やつと 四十日に なったばかりな  
んだって。」

みつ子「なまえは、なんと いうの。」

あきら「白いから、ゆき子と つけたのさ。」

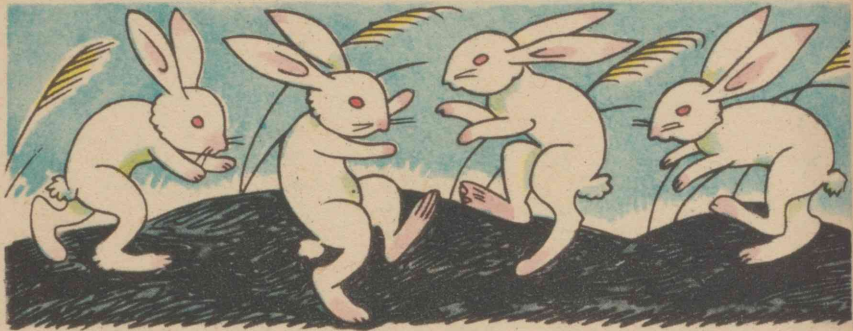
みつ子「からだは まっ白で、目の ところが まっか  
だから きれいだわ。」

ちよ子「耳の 中も もも色で きれいだね。あら、耳  
を ぴんと たてたわ。」

あきら「ぼくたちの はなしを きいて いるんだね。」

みつ子「うさぎさんに、わたしたちの ことばが わか  
るかしら。」

あきら「そりゃあ わかるさ。だって、むかしから、お



ちよ子「しらなければ、おしえて あげ  
るわね。あなたの ごせん  
ぞは——」。

みんな「お月さまの うさぎ。」

みつ子「わかったでしょう。」

みんな「ね、わかったでしょう。」

ちよ子「お月さまの うさぎさんは、  
おどりが とても じょうず  
なのよ。」

みつ子「ゆき子ちゃん おどりを お



ときばなしにも たくさん  
でてきて、にんげんとは  
なしをして いるんだもの。」

ちよ子「じゃあ、うさぎさんと、おは  
なし しましうよ。」

あきら「ああ、しう。」

みつ子「うさぎの ゆき子ちゃん、あ  
なたの ごせんぞは だれか  
しって いるの。」

あきら「しらないの。」

しえて、あげるから、  
よくみて いて お  
ぼえなさいね。

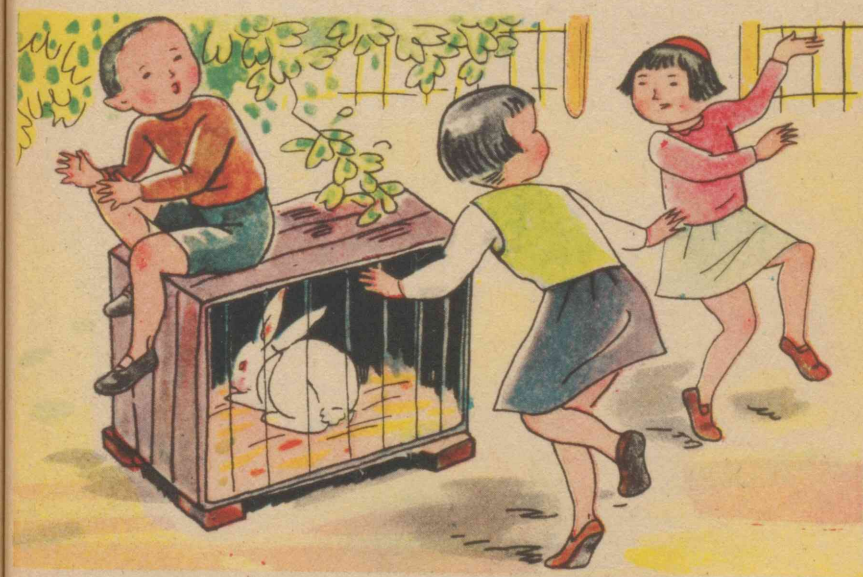
あきら 「ぼくが うたって あ  
げよう。」

ちよ子 「それでは みつ子さん、  
おどりましょう。」

あきら 「一 二の 三。」

あきらさんが うたって、

ちよ子さんと みつ子さんが おどります。



うさぎ うさぎ、ぴよん ぴよん はねる。  
なぜ ぴよん と はねる。 ぴよん ぴよん はねる。  
ことしは ほう年、草の み 木の み、  
みな ぴよん と はねる。 ぴよん ぴよん はねる。  
わたしも いっしょに、ぴよん ぴよん はねる。

あきら 「あら、ゆき子ちゃん、あっち むいてるよ。」  
みつ子 「この うさぎ、おどりが きらいなのかしら。」



ちよ子「まだ 子どもだから、あきっぱいのよ。」

あきら「じゃあ、あした また おしえて やらうね。」

みつ子「ええ、そう しましう。」

ちよ子「なかよしになつた しるしに、草を やりま  
しう。」

みつ子「わたしも やるわ。」

ちよ子さんと みつ子さんとは、<sup>(また)</sup>草をとって  
やります。

ちよ子「ゆき子ちゃん、な」

かよしになりま

しうね。」

みつ子「わたしとも なか

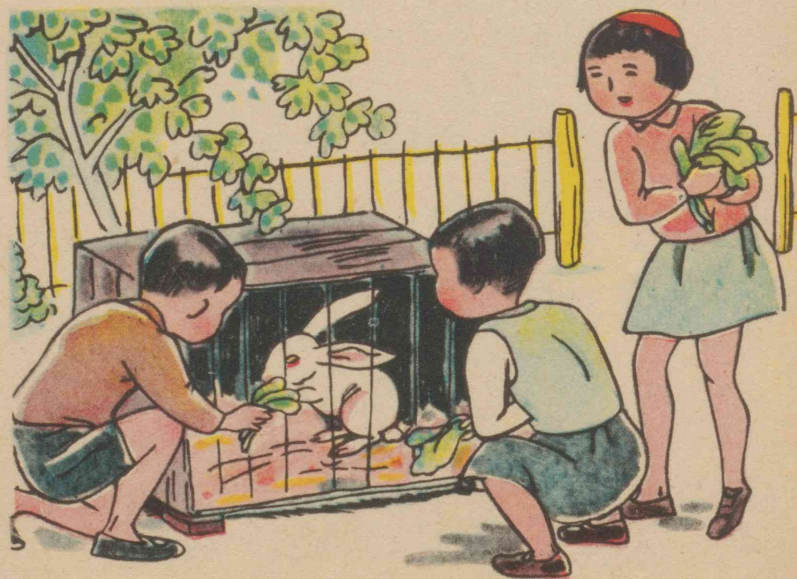
よしになりまし

しうね。」

あきらさんと みつ子

さんと ちよ子さんは、

また 草をとって やります。



九 こぐまの ぼうけん



人の すんで いる ところ  
から、ずうっと はなれた ところ  
おい ところに、大きな 山が  
ありました。

山には、木や 草や 花が、  
たくさん たくさん ありま  
した。

でも、ひゅうつと さむい 風が ふいて、それから  
ちら ちら ちら、雪が ふって くと 冬——。

冬が きたのです。  
山は 青い きものを ぬいで、  
まっ白な きものに きかえま  
した。

この 山の おくに、ことし  
うまれた かわいい こぐまが  
いました。きょうも、たべものを  
さがしに いった おかあさんを、





まって いました。

「早く かえれば いいのに。ぼく、さみしいなあ。 おかあさ

あん——」。

こぐまは、あなの いらぐちから かおを だして、あたりを みまわしました。いくら みても、

おかあさんの すがたは みえません。

そこには、ただ おかあさんの 足あとだけが、ながく ながく むこうの ほうへ つづいて いるだけです。

いくら まっても、おかあさんが かえらないので、こぐまは、たいそう さみしく なって きました。

いつも、おかあさんは でかける とき、

「ひとりで そとへ でては いけませんよ。おかあさんの かえるまで、じっと まって いるんですよ。」

そう こぐまに いって でかけるのでした。でも、

いま こぐまは、あんまり おかあさんの かえりが おそいので、さみしく なって、

「ちよっと ぐらいなら いいだろう。」とおもって、ち



よこ ちよこ、おうちの そと  
へ はいだしました。そして、  
高い ところへ あがって、そ  
の へんを みわたしました。  
「うわあい、とても いい け  
しきだなあ。むこうの 山も、  
こっちの 谷も、雪ばかりだ。

雪で どこも まっ白だ。」

こぐまは、あんまり けしきが よいので、びっくり  
しました。そのうちに、お日さまが、雲の 中から 出  
て きました。

「やあ、むこうの 山が、ぎん色に ひかって きたぞ。  
あの きれいな 山の むこうには、なにが あるん  
だらうなあ。」

こぐまが むちゆうに なって、とおくの 山を な  
がめて いると、おしりの 下の 雪が、からだの あ  
たたかみで、だんだん とけはじめました。こぐまは、  
そんな ことは、ちっとも しりません。

「ぼく、早く 大きく なって、ずっと むこうの ほ  
うまで、いって みたいなあ。」

そう、いって、おも  
わず、せのびを、した  
ときです。

「あっ。」

山の、上から、つる  
つる、どしいん——。

こぐまは、ふかい、谷そこへ、すべりおちたのです。

「ええん、ええん、ぼく、こんな、うすぐらい、谷そこ  
で、ひとりぼっちで、いるのは、いやだよ。ええん、  
ええん、ええん。」



こぐまは、ひとりで、ないて、いました。  
しばらく、すると、あたまの、上で、

「これ、これ、どう、したの。  
と、いう、こえが、きこえま  
した。」

みると、一ぴきの、きつね  
が、なにか、かついで、立っ  
て、いました。

きつねは、やさしい、こえ  
で、



「なに、この 山の 上から  
おちたって。なかないでも  
いい、なかないでも いい。  
ほうれ、こんな ごちそう  
があるんだよ。」

きつねの おじさんは、そ  
う いった、大きな にわと  
りを、こぐまの まえに だ

しました。こぐまが 大よろこびで とろうと すると、  
「こら こら、おまえ ひとりに やるんじゃない。わ



たしの うちまで、ついて  
おいで。どっさり わけて  
あげるよ。」

こぐまは、それを きくと、  
だまって きつねの あとか  
ら ついて いきました。  
きつねの うちは、谷そこ  
の くらい ところに あり  
ました。

いえの 中には、大ぜいの 子どもの きつねが ま

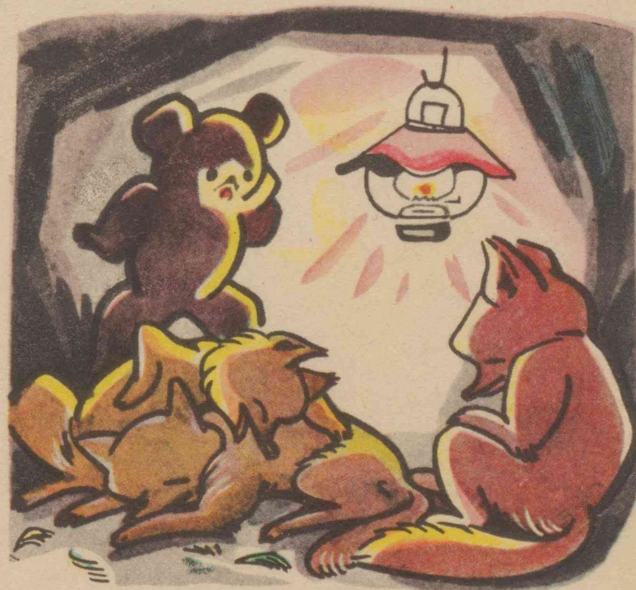
って いました。子どももの  
きつねは、おやぎつねの  
もって きた にわとりを  
みつけるが 早いかな、

「ぼくんだよう。」

「わたしんだよう。」

と、たいへんな けんかを  
はじめました。そして、に

わとりを、すっかり たべて しまったのです。おなか  
が一ぱいになると、きつねの 子どもたちは こぐ



まの みて いる まえで、

「ぐう ぐう ぐう。」

と、いねむりを はじめました。

なんと まあ、おぎょうぎの わるい 子どもたちで  
しょう。

こぐまは かんがえました。

「こんな ところに、いつまでも いたら、たいへんだ。  
ぼくも この きつねのような、いじわるで、よくば  
りで、おぎょうぎの わるい 子に なって しま  
う。  
早く かえろう。」



とつぜん、耳が つんぼにな  
ったかど おもわれるような 大  
きな おどが しました。  
りょうしが こぐまを みつけ  
たのです。そして、よい えもの  
があったとばかり、てっぼうで  
うったのです。

こぐまは、雪の 上に たおれ

こぐまは、さっさと、 きつねの うちを できました。  
そして、もう 一ど 高い ところに あがって、  
「ぼくの おうちは、どこ  
だらうなあ。早く かえ  
らないと、だんだん お  
日さまも しずみかけて  
いるし、おかあさんだっ  
て、きつと しんぱいし  
て、さがして いるだろ  
う。こまったなあ。」





ました。

「あたたったな。」

りようしが、こぐまの  
そばへ はしりよろうと  
した ときです。

おやつ。

りようしの 耳に、さく  
っ、さくっつと、雪を ふみ

しめて、だれか ちかよって くる 足おどが きこえ  
ました。ふりかえって みると、それは、大きな 大き



な おかあさんぐまでした。  
おかあさんぐまは、さっきか  
ら、こぐまを さがして、や  
っつと ここへ きたのです。  
りようしは、いそいで 木  
の かげに かくれました。  
からだを かがめて、そうっ  
と ようすを みて いまし

た。おかあさんぐまは、こぐまを しっかり だきかか  
えて、こぐまの かおに、じぶんの かおを すりよせ

て います。きっと だいじな 子どもが、うたれて  
しんだと おもって、ないて いるのでしよう。  
その ようすを みた りょうしは、おもわず つぶ  
やきました。

「ああ、かわいそうな ことを した。」

でも、よい あんばいに、こぐまは、りょうしの た  
まに あたったのでは なかったのです。

たまの おとに びっくりして、きを うしなって  
たおれただけで ありました。

しばらく して、こぐまは やつと きが ついて、

目を あけて みました。

「ああ、おかあさん。」

こぐまは、おかあさんを みると、うれしく なって、  
おもわず しがみつきました。

「ねえ おかあさん、ぼく、びっくりして たおれただ  
けさ。おかあさん、ないたり して いや いや。」

「いいよ いいよ。そんなに なみだを ふいて くれ  
なくっても。なみだなんか、もう でなく なったよ。」

こぐまど おかあさんぐまの ようすを さっきから  
みて いた りょうしは、なにを おもったのか、てっ



ぼうを さかさに かつぐと、その  
のまま、だまって、山を おりて  
いきました。

りようしも、じぶんの うちに  
まって いる 子どもに 早く  
あいたく なったのでしょう。

こぐまは、おかあさんぐまに、おんぶを して、おう  
ちの ほうへ かえって いきました。

くれがたの 空には、いつの まにか、ほしが 二つ  
三つ でて、おや子の くまを みおくって いました。

十 もう すぐ 二年せい

(一) 日なたぼっこ

かぜの ない 日。

わたしは かべに もたれて、

日なたぼっこを して います。

ぴあのの おどが、

こうどうから ひびいて きます。

ぴあのの うた、



おもしろいな。

あの うた、

二年せいに なったら ならうのかしら。

わたしは くびを ふって ひょうしを とりました。

(二) なわとび

にわで なわとびを しました。

ぼん、ぼん、ぼん、ぼん、



よく とべます。

うたを うたって とびました。

もう すぐ 二年せいに なるん。

だから、なわとび するのが いい きもちです。

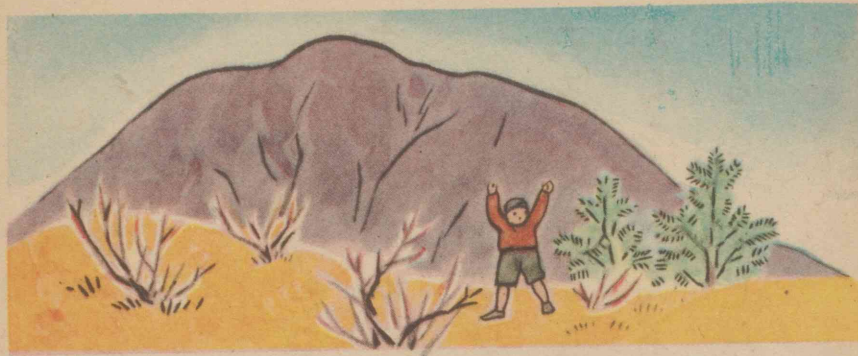
うたを うたって とぶと、

もう 二年せいに なったようです。

ぼん、ぼん、ぼんと、

空まで とんで いけそうです





ないて いるのでしよう。  
 しずかな 山の中、  
 山の中は もう あたたかい。  
 山のみちを ひとりで あるいて  
 いくと、なんだか、花の いい  
 においが して くるようです。  
 二年せいになる ころには、  
 この 山 いっぱい 花が  
 さくでしよう。

(三) 山の中

山を のぼって いくと、  
 「ちち、ちち、ちちち。」と、  
 小どりの なきごえが  
 きこえて きました。  
 山の中まで しみこむよう  
 な、小どりの なきごえです。  
 はるに なったから、



(四) もう すぐ 二年せい

がっこうから かえって、くらの よこで ほうきに  
する わらを つみあげました。

大きな こえで う

たを うたいながら、  
わらを つみあげて  
いると、うしろに お  
ばあさんが くわを



かついだまま 立って  
いました。

「大きな こえで、なに  
を うたって いるの。

たいへん げんきが  
いいね。」

と いいました。ぼくは、



おばあさんが そばへ  
きたのを しらずに いたので びっくり しました。  
「おばあさんだったの。ちっとも しらなかつたよ。」

と　い　う　と、おばあさんは　くわを　おろしながら、

「だ　い　ぶ　ま　え　か　ら　き　い　て　い　た　よ。じ　よ　う　ず　だ　ね。」  
と、にこにこしながら　い　い　ま　し　た。ぼ　く　は、

「二　年　せ　い　に　な　っ　た　ら、も　っ　と　じ　よ　う　ず　に　う　た　え  
る　よ。」

と　い　っ　て、ま　た　げ　ん　き　よ　く　う　た　い　ま　し　た。お　ば　あ  
さ　ん　は、

「よ　く　お　け　い　こ　し　て　き　た　ね。ど　れ、お　ば　あ　さ　ん　も  
い　っ　し　よ　に　し　よ　う　か　ね。」

と　い　い　ま　し　た。

ぼ　く　は、お　ば　あ　さ　ん　が　ほ　め　て　く　れ　た　の　で　う　れ　し  
く　な　り　ま　し　た。

「お　ば　あ　さ　ん、き　よ　う　は　ず　が　も　か　え　し　て　も　ら　っ　た  
し、ち　よ　う　め　ん　に　も　た　く　さ　ん　ま　る　を　も　ら　っ　た　よ。

み　て　ね。」

と　い　う　と、お　ば　あ　さ　ん　は、

「よ　し　よ　し、み　て　あ　げ　よ　う。」

と　い　い　ま　し　た。

「じ　ゃ　あ、す　ぐ　に　も　っ　て　く　る　か　ら、い　っ　し　よ　に　み  
よ　う　ね。」

と いいながら、ぼくは、かばんを とりにいきました。

つくえの上から かばんを とって、おばあさんの  
ところへ かえって きました。

ゆう日が さして、わらを つみあげて いる おば

あさんの かげが、くらの  
かべに うつつて います。  
ぼくの かげも、ならんで  
うつりました。

「おばあさん、ここは あた



たかだね。」

ぼくは おばあさんの よ  
こへ すわって、かばんを  
あけました。

「おばあさん、この えは、  
ぼくが 山へ いった と  
き かいただよ。」

と いうと、おばあさんは 手に とって みなから、  
「ほほう、なかなか じょうずに かけたね。」  
と いいました。



こんどは、さんすうの ちようめんを だしました。きようのべんきようは よく できたので、大きな まるが ついて いました。

「おばあさん、みんな まるだよ。」  
「ほう、ほう。」

と 行って、おばあさんは、にこにこしながら、

「ほんとに よく おけいこが できたね。」

と ほめて くれました。

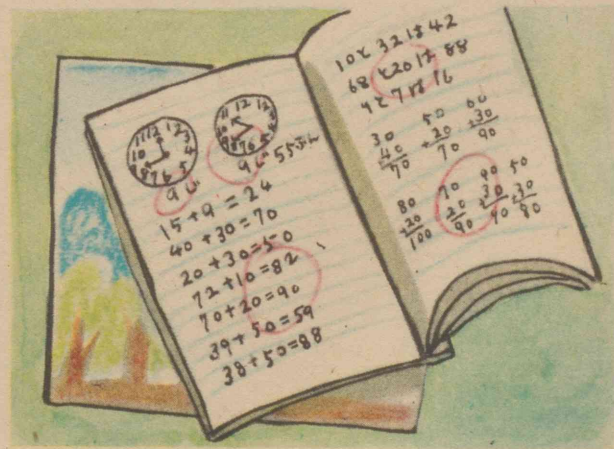
「おばあさん、ぼく 二年せいに なったら、もっと べんきようするよ。」

「もう すぐ 二年せいだね。うれしいだろう。」

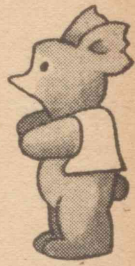
おばあさんは、また わらをつみあげながら、にこにこして いました。

日が 歩いて しまっても、まだ わらつみを しました。

いつの まにか、わらは 山のように なって いました。



ぼくは おばあさんと あとかたづけを して、うちへはいりました。



おけいこの てびき

一の まきて、よむ ちからが ついたので、  
二の まきは、おもしろい ぶんを あつめました。じぶんの ちからで、よく よんでください。

一 くりの み

(1) やくわりを きめて、たかい こえで よみあいました。

(2) □の なかへ じを いれなさい。

くりの □は いがの □□だ。

□の 日は あたかい。

二 赤い ゆうやけ

(1) 「どんぼは どちらへ いったてしょう。」  
「13 べえじ」それを、かんがえましよう。

(2) あなたは、この 子どもの したことを、どう おもいますか。

三 おと

(一) おと

びあのを ぼろんと ならして、このしを 行って みましよう。

(二) お月よ

(1) 「どなたです。」と いう ところは、べつな 人が よんで みましよう。

(2) 「月の かげ」と いうのは、「月の ひかり」の ことです。そう いう ことばが ほかに ありますか。

五 雲に なったら

(1) 雲に なったら、どんな たかい

どころへ あがつて、こうと、いつて  
いますか。

(2) どんな ときに、「どっさり」雨を  
ふらして あげますか。

(3) どんな ときに、「すぐ やみます。」  
と いつて いますか。

(4) あなたも、「なにに なったら」と  
いう おはなしをして ころんなさい。

六 ニひきの やぎ

(1) ニひきの やぎは、はしの まん申  
で、なんと いいあいましたか。

(2) あなたは、この ニひきの やぎを、  
どう おもいますか。

七 いろはあそび

(1) ろの つくもの、はの つくもの  
などの、ことばあそびを しましょう。

(2) おもしろい、いろはがるたを つく  
りましょう。

八 うさぎ

(1) やくわりを きめて、あそびましょ  
う。

(2) ちよ子さんと みつ子さんが おど  
るとき、あきらさんは、なんと うた  
いましたか。

九 こぐまの ぼうけん

(1) あなたは、この おはなしの、どこ  
が すきですか。

(2) りょうしは、なぜ、てっぽうを さ  
かさに かついて、山を おりたので  
しょう。

(3) こう いう おはなしを、たくさん  
よんだり はなしたり しましょう。

十 もう すぐ 二年せい

(一) 日なたぼっこ

(1) どこで 日なたぼっこを して い  
ますか。

(2) ぴあのの うたを きいて、どう  
おもいましたか。

(二) なわとび

(1) なわとびを すると、どうして き  
もちが よいのでしょうか。

(2) すきな ところを、ちようめんに  
かいて みましよう。

(三) 山の 中

(1) 小どりの こえは、どんなに きこ  
えて いますか。

(2) 山の 中は、どんな ようですか。  
(3) みなさんも、このような みじかい

ぶんを かいて みましよう。

(四) もう すぐ 二年せい

(1) がっこうから かえつて、どんな  
おてつたいを しましたか。

(2) おばあさんは、どんな ことを ほ  
めて くれましたか。

(3) この 一 こともは、なぜ、大きな こ  
えて うたを うたつたり、おばあさ  
んに えや さんすうの ちようめん  
を みせたり したのでしょう。

(4) おてつたいを した ことや、はるが  
きた ことや、もう すぐ 二年せいに  
なるので うれしい ことなどを、この  
ような ぶんを かいて みましよう。  
(5) 一年せいで ならつた かんじを そら  
で かける ように、おけいこ しましょう。

おなじ 12  
 おぼえ(な)なら 44  
 おろし(ながら) 74  
 かいだ 77  
 かえし(て) 75  
 かがめ(て) 63  
 かぞえ(て) 5  
 かく 8  
 かつい(て) 55  
 かばん 76  
 かべ 67  
 かるた 37  
 かわい 40  
 かわい(そう)な 64  
 かんがえる 36  
 き(こ)え(ました) 55

55 36 64 40 37 67 76 55 8 5 63 75 77 74 44 12

きつど 27  
 きもち 69  
 きもの 49  
 きらいな 45  
 くつつ 30  
 雲 26  
 くら 72  
 くれがた 66  
 くれた 75  
 くわ 72  
 くわしく 29  
 けしき 52  
 げんき 73  
 こうどう 67  
 こつそりと 10  
 こと 36

36 10 67 73 52 29 72 75 66 72 26 30 45 49 69 27

ことば 36  
 こまつ(た) 60  
 ころ 71  
 こんど 78  
 さがし(に) 49  
 さして 76  
 さみしく 51  
 さむい 49  
 さんすう 78  
 しずか(な) 71  
 しつ(て) 42  
 しつかり 63  
 しばらく 55  
 しらずに 73  
 しみこむ 70  
 じょうずな 43

43 70 73 55 63 42 71 78 49 51 76 49 78 71 60 36

あいません 11  
 あかるい 12  
 秋 9  
 あけて 17  
 あした 46  
 あたたかい 9  
 あたり 50  
 あとかたづけ 80  
 あな 50  
 あぶない 34  
 雨 14  
 いが 4  
 いしや 35



35 4 14 34 50 80 50 9 46 17 9 12 11

いす 35  
 いた 35  
 いちば 35  
 いと 11  
 いねむり 59  
 いも 36  
 いやだ 31  
 いろいろ 36  
 いわ 36  
 うしなつ(て) 64  
 うしろ 72  
 うた 38  
 うたつ(て) 44

44 38 72 64 36 36 31 36 59 11 35 35 35

うた(た) 61  
 うつつ(て) 76  
 えだ 7  
 えもの 61  
 えん 11  
 えんどつ 26  
 おおぜい 11  
 大きき 37  
 おく 49  
 おそい 51  
 おと 15  
 おどり 43  
 おなか 58

58 43 15 51 49 37 11 26 11 61 7 76 61

あたらしく 35  
 であ 35  
 おもな 35  
 ことば 61

のびる 29  
 はこ 39  
 はし 13  
 はし 32  
 はなし(て) 13  
 はなれまい(ん) 8  
 はる 70  
 びあの 15  
 びつくり 73  
 日なた(ぼっこ) 67  
 ひびい(て) 7  
 ひょうし 68  
 ひらい(た) 37  
 ひろがっ(て) 12  
 ふい(て) 49  
 ふい(て) 65

ふっ(て) 68  
 冬 49  
 ぼうき 72  
 ほしい 30  
 ほめ(て) 75  
 まる 75  
 みまわ(しました) 50  
 むちゅうに 28  
 むら 14  
 目あて 21  
 めずらし(い) 29  
 もたれ(て) 67  
 もよう 23  
 やくそく 8  
 やすん(て) 10  
 やみ(ます) 31

ゆうやけ 10  
 ようす 63  
 よこ 72  
 よなか 14  
 りょうし 61  
 わかつ(た) 43  
 わけ(て) 57  
 わたし 67  
 わたり 32  
 わら 72  
 わるい 59

じょうふな 30  
 しるし 46  
 白 21  
 しん(た) 64  
 しんばい 60  
 ずが 75  
 すがた 50  
 すっかり 58  
 すん(て) 48  
 そうつと 63  
 そば 62  
 だいじな 58  
 だいぶ 74  
 たいへんな 58  
 たおれ(ました) 61  
 谷 52

たに川 32  
 たべもの 49  
 たま 64  
 だまつ(て) 57  
 ちかよつて 10  
 ちつども 73  
 ちようど 11  
 ちようめん 75  
 つくえ 76  
 つけ(た) 13  
 つづい(て) 50  
 つぼみ 29  
 つみあげ(て) 72  
 つよく 8  
 てき(た) 78  
 てつだつ(て) 38

どけい 38  
 とつ(て) 46  
 とつぜん 61  
 とまつ(て) 10  
 なかま 13  
 なかなか 77  
 ながめ(たり) 12  
 なつたら 68  
 なみ 23  
 なみだ 65  
 ならし(ました) 11  
 なわとび 68  
 におい 71  
 二年せい 67  
 にんげん 42  
 ぬれ(ながら) 14

冬	耳	山	月	秋
(49)	(41)	(26)	(17)	(9)
早	色	花	白	赤
(50)	(41)	(29)	(21)	(10)
高	年	草	青	子
(52)	(45)	(29)	(21)	(10)
谷	風	中	雲	空
(52)	(49)	(32)	(26)	(12)
立	雪	足	火	雨
(55)	(49)	(34)	(26)	(14)

編修委員

日本女子大学付属  
豊明小学校主事  
東京学芸大学竹早  
付属小学校教諭  
同  
成蹊中学校教諭  
日本女子大学付属  
豊明小学校教諭  
作家

西原慶一  
山下正雄  
泉節二  
山田多喜雄  
飛田多喜雄  
小山立夫  
小田立夫  
齋田喬

高橋庸男  
藤沢龍雄  
吉沢廉三郎

小林和郎  
高橋庸男  
藤沢龍雄  
吉沢廉三郎

川上四郎  
伏石繁男  
山上喜司

耳野卯三郎

さし絵・表紙

Approved by Ministry of Education (Date Oct. 26, 1950)

こくごのほん二(小学校第一学年後期用)

昭和二十六年五月十日印刷  
昭和二十六年五月十五日発行  
(昭和二十五年八月十二日文部省検定済)

定価 円 銭

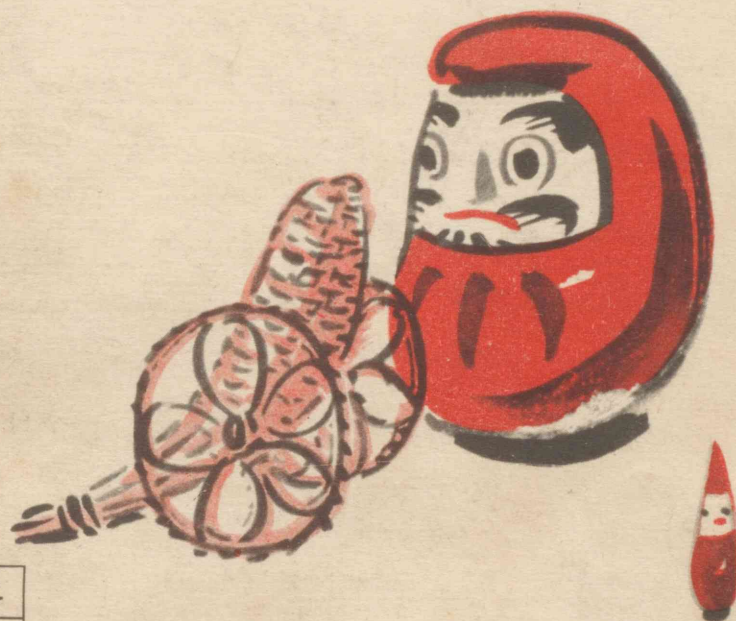
著作者 代表者 西原慶一

発行者 東京都北区稲付町一丁目二〇八番地  
二葉株式会社  
代表者 大野治輔

印刷者 東京都北区稲付町一丁目二〇八番地  
二葉株式会社  
代表者 大野治輔

発行所 東京都北区稲付町一丁目二〇八番地  
二葉株式会社

12	小国153
二葉	



なまえ

広島大学図書

広島大学図書

0130449921



二葉株式会社

文庫

50

921